

「実家が工務店をやっている、自分が長男だったということもあり、なんとなくそういう道に行くのかなというのはわりと小さいころからあったんですね。中学・高校・大学とその先を考えたとときに、どうせ始めるなら早い方がいいかなと思って高専の建築学科に行くことにしたんですけど、それを決めたのが中2ぐらいのときだったんです。全然美談ではないんですけども(笑)、わりと自然な流れで、そんな感じで始まっています」

「ご実家の工務店では住宅や店舗の設計・施工をしており、併設の木工所からはのぎりの音が毎日聞こえてきたそうです。」

「高専は5年制なんですけど、その当時は高専を出たら就職する人が多かったんです。高専は定員が40人なので、その1割ぐらいがその後進学、編入という感じだったんですね。高専の4年生のときに研修じゃないですけど、どこか設計事務所や企業に行つて就職活動の一手前のようなことをやるんです。僕は安藤忠雄さんに興味があって、夏休みの間バイトさせてもらいました。あれが19歳ぐらいのときかな」

通っていた高専はどちらかといえば技術者を養成する学校だったので、設計の奥深さがその当時はまだよくわからなかったと思う。もっと勉強したいと思った彼は横浜国立大学に編入した。

「横浜国立大が設計で面白い教育をやっているというふうなうわさを聞いて受験することにしたんですが、その当時はインターネッとも身近ではなく調べる手段も見つからなくて、こしかな。というほど強い思い

ではなかったんです。でも、入ってみてびっくりしました。高専のときはわりと実務的な話や教育が多かったんですけど、僕が編入した大学2年生というのはまだそんなに専門的な教育をやっていないので、かなり奔放なんです。周りのみんなに比べて、自分はすこく頭が固くなってるなと感じました。知識があるがために何か範囲を狭めているようなところもありました。同級生と一緒に設計をやっていると、とんでもないことを考えるような人が結構いて、一種のカルチャーショックを受けました」

違う世界があるということを知った彼は、方向転換。次の道が開けたように感じたといい。努力のかいあって大学の卒業設計では吉原賞(最優秀賞)を受賞。しかし大学卒業後の就職ではまだまだ知識も考え方も足りないと思ひ大学院へ。建築を概念的に捉え直す考え方を学んだ。自分のやりたいことに集中できる環境にも恵まれた。

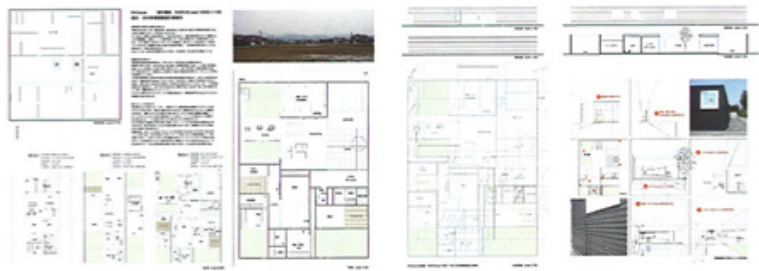
「まだそのころは詩的なイメージというか、何か空間のイメージから建物を構成していくような考え方をしていたんですけど、建築への概念的なアプローチとか、プログラムと呼ばれていた全く違う設計アプローチがあって、そういった部分を大学院の教育では教えていたんです。修士の2年のときにたまたま妹島和世さん、西沢立衛さんと出会う機会があって、妹島さんと西沢さんはその方面の最先端をいっていた人なので、2人のもとで働きたくて就職できることならと思ったわけです。修士2年の6月からに建築学会の学生参加イベントで妹島さんと西沢さんの2人に付いて3週間程ワーク

吉村寿博

建築家

「人に何かを与えられる建築」を目指す建築家、吉村寿博。
 建築家はそこに「何か」を吹き込み、
 使う側はそこから新しい価値観や世界観、プラスαを受け取る。
 この気鋭のアーキテクトにとって今日までの歩みはまだ第一楽章か、
 それとも第二楽章はもうすでに始まっているのか。
 諦めかけていた“我が家”も彼ならば実現してくれそうな気がする。

編集部=取材・文 Taro=写真
 text by LIFEwork photographs by Taro



右:M-house 計画案・平面図 (福井、2005年)、左:M-house 計画案・イメージパース (福井、2005年)